

は し が き

センター長 江 口 修

平成6年末、三陸はるか沖地震で揺れたときには、ようやくソフト面でも軌道に乗り始めたコンピューターラボは大丈夫かと不安に駆られました。次いで厳しい冷え込みで迎えた新年、結露は大丈夫かと覗いてみたところどうやら無事。新鋭機器もデリケートな面を備えているためか気苦労は絶えないようです。

さて本学で長く中国語教育を担当された名誉教授川上久壽先生がかねてご病氣療養中のところ、平成7年1月12日逝去されました。そのご功績を偲びご冥福をお祈り致します。

先生の訃報に追い打ちをかけるかのように阪神地区を襲ったのがあの兵庫県南部地震（阪神大震災）でした。大学関係者や学生にも多くの犠牲者が出たことはもちろん、あまりの惨禍に声もできません。亡くなられた方の御霊の安からんことをただただ祈るばかりです。

冒頭から不安を掻き立てるようなニュースばかり並んでしまいましたが、平成6年度の本センターの歩みを振り返っておきましょう。センターの教育面での大きな動きは二点あげられると思われれます。第一点は、六年度より外国語Ⅲがいよいよスタートしたことです。英語ではクラス編成について履修学生の数を読み切れない不安がありました、とりあえずすべての外国語についてクラスを開講できたことは喜ばしいことでもあります。これと連動したのか、第二点として、夏期短期海外語学研修の参加者の増加と効果の増大が見られました。本学の理念の一つである「外国語教育の重視」が確実な形として定着しつつあることの証左でありましょう。また国際化の進展の帰結として「朝鮮語」の外国語科目としての開設が日程に上ってきたことも感慨深いものがあります。しかし順風満帆とばかりは行きません。特にコンピューターラボの具体的運用においては様々な問題が起こってきました。未習熟の学生による機器やソフトへの損傷、学生自習用の時間帯を設けることができないため情報処理センターに多大な迷惑をお掛けしてしまったことなどです。さらにいわゆるコンピューターリテラシーの問題で、教える側にもばらつきがあるため、一部の方に過重な負担を強いてしまう結果を招いていることは大きな問題です。これは来年度概算要求として認められる予定の多用途メディアシステムが完成した暁にはいよいよもって深刻化する恐れがありますので、チームで新施設の運営に当たる態勢を至急確立する必要があると思われれます。ともかく前センター長永原先生が腐心なさっておられた視聴覚教育施設の更新拡充がともかくも最終段階を迎えることができたことについて、この場をお借りして先生のこれまでのご苦労に深く感謝の意を表させていただきたいと存じます。

本年度は教官の異動はありませんでしたが、平成七年度予定されていた学生臨時増募に伴う教官定員増分の返還が猶予されたため、個別言語部門ロシア語系アレクサンドル・スペバコフスキー助教授が引き続き任用されることとなりました。

教官の海外研修も引き続き活発でした。高橋純教授（比較言語・文化部門）が平成5年度の本学後援会資金の援助を得て3月末にフランスはパリの高等学術研究院での研修に出発されたのに続いて、下村五三夫助教授（応用言語部門）もやはり平成六年度の後援会資金援助を得てポーランドはワルシャワの科学アカデミー文化研究所での研修に赴かれました。お二人とも一年の予定

でしたが、高橋教授は約六カ月、下村助教授は一年、それぞれ滞在を延長されることが承認されました。その他では大島教授（英語系）が6月24日より7月26日にかけて文部省科学研究費補助金を受けた国際学術研究「カムチャッカ半島の民族芸能調査／コリヤク族の伝承芸能調査」の研究分担者としてロシア連邦カムチャッカにおいて現地調査に当たられ、その後引き続き米国アラスカ州に向かわれ同じく「アリュートの言語調査」に従事されました。本学外国人教師のグイアン＝カマラータ・チャールズワース先生は6月30日より7月14日にかけて第三回国際婦人演劇学会出席のためオーストラリア、アデレードのフリンダース大学に出張されました。高井收助教授（応用言語部門）は8月11日から27日まで米国オレゴン大学での日本語教育実地調査の他、オハイオ州コロンバス州立図書館およびカナダはバンクーバーのブリティッシュ・コロンビア大学図書館で研究資料の調査収集に当たられました。さらに吉田直希講師（英語系）も7月18日から8月29日まで、米国カリフォルニア州スタンフォード大学他にて研究資料の調査収集で研修に出かけられました。鈴木将史助教授（ドイツ語系）はドイツ政府の補助を得て11月27日より平成7年1月30日までフライブルグのゲーテ・インスティテュートにてドイツ語教授法の研修を行われました。

その他、本センター恒例の外国人教官による外国語公開講座は、裴崢助教授（中国語系）の新講座開設により3講座となり、いずれも好評でした。特筆すべきは本センターの言語学関係の教官を中心に日本語の非常勤講師の協力も得て行われた公開講座「外国語としての日本語——日本語教師を目指す人のために——」（10月4日～11月4日）の成功で、小樽市民と本学との間において国際化に向けての協力体制創出の気運が盛り上がったと大いに評価されています。

最後に、大学をとりまく情勢はいよいよ変化の度合いを増しつつあるように思われます。大学はゆったりとした研究・教育の場であるべきですが、社会全体が変わりつつある今日、新時代を展望できる構想力を持たねばなりません。異文化との接触のある意味ではエキスパートであるわれわれ言語センタースタッフ一同、大いに意見を戦わせつつ、外国語教育の本学にふさわしい新しい展開を見通せるよう、いっそうの研鑽努力をお願いいたします。

なお平成6年度、次の出版物が当センター名で刊行されました。

1. 風間伸次郎採録・訳注『ナーナイの民話と伝説』（ツングース言語文化論集5）、小樽商科大学言語センター、1995年2月
2. 朝克採録・著／津曲敏郎編『鄂温克語三方言対照基礎語彙集』（ツングース言語文化論集6）、小樽商科大学言語センター、1995年3月